

## 日々の繰り返しの中で

広島大学 横尾京子

特殊メガネが欲しいと思ったことはありませんか。焦点を合わせたところに要注意菌があれば変色し、その色でたちどころに菌種や病原性を識別できる…こんな都合のいいメガネ。どこに、どんな菌が巣くっているのか、ある種、脅迫観念にも似た面持ちで、感染予防、感染予防と、そんな毎日ではありませんか。一日たりとも気が抜けない、それは、抵抗力の少ない子どもたちを護るには不可欠なこと。絶えることなく繰り返される看護婦の一つひとつの行為に、知識に支えられた誠実さと注意深さを行き届かせる、いつまでも、その大切さは変わりません。

毎日子どもたちのケアをしていて、知りたいと思うこと、それは子どもたちの気持ちや思いでしょうか。側にいて、じっと様子を観ていると、お互い(?)に心を通わせることもできそうです。修正20週代の子どものいえども毎日は禁物。治療や病気からの辛さから解放されると、結構いろいろなサインを出してくれています。例えば、授乳時間が近づいてくると、唇を微妙に動かせたり、指先をピクつかせたりして、「お腹空いたの?」。乳汁がチューブを通して胃の中へ、すると、その内、体の動きが止り、眠りが深くなったように見えてくる…そして、乳汁が後少しというところで流れなくなる、「もう、お腹いっぱいなの?」…。こんな和やかな時間もハイリスク児看護の一コマかなと思ったりもします。一日何回となく繰り返される tube-feeding, それが、手順の実行で終わってしまうのは、少しばかり悲しいことかもしれません。

とても気になることの一つ。子どもの痛み体験が十分にわからないこと。毎日、何度も繰り返される痛い処置、避けられるものなら避けたい、誰しもそう思っているのですが、案外と、無頓着に処置が行われているかもしれません。言葉に代る言葉を、早く、発見していきたいと思います。

NICUで日々繰り返される、看護婦にとって日常的なできごとは、その子どもを「しる」ことによって新鮮さに溢れたものとなるのではないかと思います。看護婦の働きが子どもたちの「今」に幸福をもたらすことができますように。